

手紙……言葉でのやりとりするコミュニケーションと違い、書き言葉でのコミュニケーション。改まった形の表現。より相手の思いが凝縮して伝わる。特別なもの。特別な関係の相手に出すもの

お手紙

アーノルド・ローベル 作

みき たくや

やく

がまくんは、玄関前に 座っていました。

かえるくんがやって来て、言いました。

「どうしたんだい、がまがえるくん。きみ悲しそうだね。」

「うん、そうなんだ。
がまくんが言いました。」

「今、一日のうちの かなしい時なんだ。」

つまり、お手紙をまつ時間なんだ。

そうになると、いつもぼく、とてもふしあわせな気持ちになるんだよ。」

Q どんな姿がうかんでくる？

- ・しょんぼり
- ・肩を落として 下を向いてる。
- ・半泣きの顔

来ないと分かっている。でも「ひよつとしてくるかもしれない」という思いで、つい玄関まで出てしまう。

ぶらりとやってきた感じ。

見るなりその声をかけてしまうほどに、座っている姿に悲しさが見える

かえるに対する返答というより、独白的。「悲しそうだね。」と言われて一層気がめいる。

「手紙が来ない自分」、誰も気に掛けてくれない存在であることを思い知らされる。

「そりゃ、どういうわけ。」
かえるくんがたずねました。

「だって、ぼく、お手紙 もらったこと ない
んだもの。」
がまくんがいました。

「いちどもかい。」
かえるくんがたずねました。

「ああ。いちども。」
がまくんがいました。

「だれも、ぼくに お手紙なんかくれたことが
ないんだ。」

※なんか 〓望ましくないもの、価値の低いものとしてあげる。
など。「おまえ」に同情されたくない」

毎日、ぼくの郵便受けは、空っぽさ。

お手紙を まっているときがかなしいのは、そ
のためさ。」

ふたりとも 悲しい気分で、玄関の前に こし
を下ろしていました。

かえるにはがまの言葉が意味不明

ぼつりと消え入るような声。友だち
のかえるにだってこんなことはい
たくない。

あきれるように。まさか、一度もも
らったことがないなんてことは無い
だろう、という思い。

かえるの「いちどもかい？」でいつ
そうみじめな思いになる。自嘲的に
はき出すように言う。

「手紙」へのあこがれの裏返しとし
ての軽蔑的な言い方

「お手紙なんかくれたことがない」
「おまえなんかそんなやつなんだ」

「おまえは誰ともつながっていない
一人ぼっちなんだぞ」ということを
空っぽの郵便受けが見せつける。

◎「空っぽの郵便受け」をどんな顔
で見ているかな？

がまの悲しさは書き表されている。

では、かえるの悲しい気分の中身は
何だろう？

・ 共感……それは悲しいだろうなあ。
がまくんの気持ちはよくわかる
・ 親友でありながら、がまが、そん
な悲しみを抱えていることに気づい

てやれなかった自分を責める思いもあつたのではないだろうか。

「こしをおろしていた」

「すると」

「この間にしばらく時間がある。

その間かえるは何を考えていたのだろうか？

・どうしたらがまくんを元気づけてやれるのだろうか。

・親友として何がしてやれるだろうとあれこれ考えていた。

「すると」……かえるの側で言えば、「そうだ！」と手立てがひらめいた。

悲しみに沈んでいるがまを放つて帰るのは冷たく見えるかもしれない。でも、今はそう言うしかない。ほんとの訳は言うわけにはいかない。

思いついた計画（今、玄関で待つているがまくんに手紙を届ける）の実行に猶予は無い。一秒も無駄にはできない、という思いで行動している。

○こを読んできて、どんなかえるくんの姿が見えてくる？お茶を飲んでいっふくしながらやってる？どんな顔をして動いているかな？

「とびだしました」……どこへ行くとうとしたの？

手紙はできた。あとは、この手紙を配達してくれる者を探すこと。誰かいなか！

「ちよūdいところをいた！」とびつくような勢いで「かたつむりくーん！」

すると、かえるくんが言いました。

すると＝前の文の内容を受けて、「そうすると……になる」「……する」という続いて起こる状態や動作を以下に述べるときに使う

○確定条件「……した。すると……になった／……した」

前述の内容が実現したことを傍観して、そのときその場面で生じた事態を以下でのべる。

「浦島太郎は思いあまつて玉手箱のふたを開けてみました。すると、箱の中から煙が立ち上つて、浦島太郎は白髪のおじいさんに成ってしまいました。」

「ぼく、もう家へかえらなくっちゃ、がまくん。しなくちやいけないことが、あるんだ。」

かえるくんは、大急ぎで家へかえりました。

エンピツと紙をみつめました。

紙になにかかきました。

紙をふうとうにいれました。

ふうとうに、こう書きました。

「がまがえるくんへ」

かえる君は、家からとびだしました。

知り合いかたつむり君に会いました。

「かたつむりくん。」
かえる君が言いました。

「おねがいだけど、このお手紙を がまくんの家へ持って行って、ゆうびんうけに 入れてきてくれないかい。」

かたつむり君が言いました。

「まかせてくれよ。」

かたつむり君は言いました。

「すぐやるぜ。」

それから、かえるくんは、がまくんの家へもどりました。

がまくんは、ベッドで お昼ねをしていました。

「がまくん。」

かえるくんが言いました

「きみ、おきてさ、おてがみが来るのを、もうちよつと まって見たら いいと 思うよ。」

「いやだよ。」

がまくんが言いました。

「ぼく、もう まってるの あきあきだよ。」

かえるくんは、まどから ゆうびんうけを見ました。

かたつむりくんは、まだ来ません。

来る＝話し手と動作者とが別の場合 話し手が今いる場所、または話し手の領域にやってくる。自分のいる方に接近・到着する。 「いっちょいっちょ」 「客がくる」 「やっど電車がきた」

必死、真剣に。まくしたてるようないきおいで

かたつむりのキャラクターだと、おつとり、のんびりした言い方か。

「すぐ」の時間感覚がかえるくんとかたつむりくんでは全く違うのだが、それを考えている余裕がない。

ふてくされて寝ていたか。

・勢い込んで言った

・にんまりとしてもったいぶるように言った。

どちらのイメージで読んでもおもしろい。

◎ 「このとき、かえる君、どんな顔して、どんな声で言ってるかな？」

全く反応しない。

完全な無気力状態

・一回目より更に強い調子で

「がまくん。」

かえるくんが言いました。

「ひよつとして、だれかが、きみに、お手紙をくれるかも、しれないだろう。」

「そんなこと、あるもんかい。」

そんな二聞き手、または、そのそばにいる人が当面している事態や、現に置かれている状況がそのようであるさま。それほどの。そのような。「話は聞いたことがない」「一に嫌ならやめなさい」

がまくんは言いました。

ぼくに、お手紙をくれる人なんて、いるとは思えないよ。」

かえるくんは、まだから、のぞきました。

覗く…間を隔てる障害をとりのけて見る。

高い所からからだをのりだして見おろす。

「谷底をーく」

かたつむりくんは、まだやって来ません。

やってくる【遣って来る】こちらへ近づいて来る。向かって来る。

「でもね、がまくん。」

かえるくんはいいました。

「きょうは、だれかが、きみに、お手紙、くれるかもしれないよ。」

・もっと丁寧に、かんで含めるような言い方で

・「ひよつとして、だれかが」

何とか待ってみる気になるように、気を引く言い方をした。

誰かがぼくに手紙をくれるようなことなんて絶対無い。

無力感に加えて怒りの感情も重なってくる

「見ました」から「のぞきました」に表現が変化。もう、かたつむりの姿が見えるのでは、と待ち焦がれている姿が「のぞきました」から読める。

「まだ来ません」から「まだやってきません」に表現が変化

何とがまの気持ちを引き起こしたい。

「ひよつとして」「ではあいまい、」「きょうは」と具体的に言えば

「ばからしいこと、言うなよ。」
がまくんが言いました。

「今まで、だれも、お手紙 くれなかったんだ
よ。 きょうだって 同じだろうよ。」

かえるくんは、まどからのぞきました。
かたつむりくんは、まだやつて来ません。

「かえるくん、どうして、きみ、ずっと、まど
の外を見ているの。」

がまくんがたずねました。

「だって、今、ぼく、お手紙をまっているんだ
もの。」

かえるくんがいました。

「でも、来やしないよ。」

がまくんが言いました。

「きつと来るよ。」

かえるくんが言いました。

「だって、ぼくが、きみにお手紙出したんだも
の。」

「きみが。」

がまくんが言いました。

「お手紙に、なんて書いたの。」

かえるくんが言いました。

「ぼくは、こう書いたんだ。」

《親愛なる、がまがえるくん。

ぼくは、きみが ぼくの親友であることを、う
れしく思っています

きみの親友、かえる》

親愛…親しみ愛すること。人に親しさを感じ、愛情をいだいて
いること。「一の情」「一なる諸君」

親友……信頼できる親しい友。仲のよい友人。「無二の一」

かえる君への怒りを含んでいる」

前述の文と同じ表現をしているが、
一層あせりを募らせている。
「早く、来てくれ！」とまどから覗
き続けている

- ・ 不思議そうに
- ・ 驚き
- ・ ぱつと顔を輝かせて
- ・ おそろおそろ

「ああ。」

がまくんが言いました。

「とても いいお手紙だ。」

感動を込めて

「空っぽの郵便受け」 誰もぼくなにか気にも掛けてくれない。ひとりぼっちなんだなあ ひとりぼっちの悲しみ。

でも、すぐそばに、ぼくのことをこんなに大切に思っていてくれるかえるくんがいたんだ、という気づき。これまでの不可解な動きは、すべて、僕を元気づけようとしてやってくれたことだったんだ、という気づき。

がま……初めて手紙をもらえる

かえる君はぼくのことをとても大切に思っていてくれる

かえる……自分のしたことで、がま君が心の底から喜んでいてくれることがうれしい。

長いこと まっていました。

四日たって、かたつむりくんが、がまくんの家につききました。

そして、かえるくんからのお手紙を、がまくんにわたしました。

お手紙をもらって、がまくんは、とても よろこびました。

かたつむり君にとつての「すぐ」は4日という時間を要する仕事。かたつむり君も精一杯努力してやっとながま君の家にとどりついたのだ。

・届いた手紙にはかえる君の心が詰まっている。加えてかたつむり君の誠実な心も籠もっている。